

大会を振り返って —後輩たちへのメッセージ—

平成13年卒 松村 謙太郎
田 添 順也

今年、同立戦11年ぶりの優勝、3年ぶりの全国大会出場を果たすことができた。幸運が味方した部分も多く、私たちの実力が十分であったとは言いがたいが、航空部生活の集大成として、大変貴重で、楽しい経験であったと思う。同時に、現在、我が部が抱えている課題についても気付かされた。以下に競技会を通して得た経験、4年間の航空部生活を振り返り、今感じることをできる限り後輩たちに伝えたいと思う。(4回生の松村、田添と3回生氏家による反省会)

氏家：まずは全国大会お疲れ様でした。感想は？

松村：楽しかった。でも、もう1回得点を挙げておきたかったなあ。

田添：とりあえず周回して得点できて良かった。周回した時のフライトが4年間で一番楽しいフライトだったかな。

氏家：順位に対する評価は？

松村：個人で10位、団体でひとけたには入りたかったなあ。そのため、もう1周欲しかった。

田添：良い成績とは言えないかもしれないけど、予選を「棚ぼた」で通過したわりには良かったかな。後輩のみんなには今年の成績に甘んじてほしくないけど、自分なりに精いっぱいやった結果だから、ある程度満足。

氏家：では早速ですが、3つの大会（東海・関西、同立戦、全国）を通して、僕たち後輩に伝えたいアドバイスをお願いします。

松村：まず、大会のおもしろさというか、高度を距離に変えて飛ぶ楽しさを是非知ってもらいたいな。木曾川や福井での訓練の先にどんな世界があるのかを知らずに過ぎていく人があまりに多い。遠くまで飛んでいくことがグライダーの本当の楽しみ方なのに…。

田添：大会やクロスカントリーを意識しているかどうかで長期的にあげられる成果も異なってくるだろう。まず距離を飛ぶ楽しさを知り、その上で、木曾川での訓練をそこに至るまでの段階として位置付けることが重要。

氏家：でも、普段の合宿で距離飛行の楽しさを知るといのは難しいのでは？

田添：木曾川では気象条件などから、距離を意識したフライトが難しいのは事実。だから、今回の全国大会のような機会を積極的に利用してほしい。クルーとして大会に参加した人は、大会の雰囲気を知ることができたと思うし、それぞれに大会の楽しさを感じてもらえたと思う。そういう意味で今回、たくさんの人をクルーとして参加させることができたのは良かった。

松村：木曾川や福井など、僕たちの「日常」から外に目をむけ、できるだけ広い視野でグライダーを見ることが大切。全国大会クルーもその一つの手段。「日常」の外へも積極的に飛びに行ってみてほしい。関東や北海道の滝川、いずれは海外へも足を伸ばしてほしい。きっとグライダーのスタンダードが見えてくるはず。

田添：ソアリング上達の近道は、何と言ってもサーマルの中での時間を多くすること。たくさん飛んで、たくさんサーマルに出会えるよう努力してほしいな。

松村：いろいろな場所で飛んだ経験や知識を普段の木曾川合宿にフィードバックさせることも忘れないで。多くの経験をするほど木曾川でできる練習の幅も広がるはず。条件が悪いと言われる木曾川でも宿舎を往復飛行することは時々ある。そのチャンスがいつ訪れるのかをデータや空の様子から分析し、チャンスが到来した時には確実にそれ

を生かす。そういうことを意識することで、合宿の充実度がずいぶん変わってくるよ。

田添：悪い条件を単に「不利」な要素ととらえずに、悪くても前に出るための絶好の練習と考えることもできる。でも、これには先にある目標がしっかり見えている必要があるし、ソアリング経験がないとはなかなか難しい。それで、僕もそうだったように、多くの方は離着陸練習のみに終始してしまう。

氏家：なるほど、普段から目標を意識しているか否かでは、同じことをしていても結果が大きく異なってきますね。ところで、関東の連中と関西の人間では、どれくらいの差があるのでしょうか。

松村：彼らはうまいよ。単にソアリング技術が優れているというわけではなく、経験に裏付けられた上手さを感じるね。発数、サーマルの中での時間も僕たちよりだいぶ多い。意識レベルでも、距離を飛ぶということをかなり身近に感じているようだ。

田添：奴らは変態だ（笑）。ディスクスでも周れない悪い条件の日に、ASK23で41kmのタスクを周ってきた時はもう…。

氏家：それでは僕たちが関東の選手に勝てる日は遠いですね。

松村：あきらめることはないよ。確かに彼らには地の利があって、妻沼の特徴的な気象条件やサーマルの発生しやすい場所などをよく知っている。こういう日には、どこまで上がって、どういうコースを飛ぶのが一番効率的かということも経験的にわかっている。要するに、全国大会での関東と関西の決定的に大きな差は経験の差なんだ。これを補うために妻沼でフライトする機会を多くしたり、妻沼に詳しい人から情報を集めたりする努力

が是非必要になってくる。過去の『方向舵』の全国大会に関する記事も参考になるし、今年の大会では、大会中の気象や、サーマルの様子を記録しておいたので、来年は参考してほしいな。そういう同志社内での資料を毎年蓄積していけば、将来的にきっと選手の経験を補う材料として役立つはずだ。

田添：実際、妻沼での飛行経験が豊富な名大や阪大が過去に全国大会でも好成績を残している。彼らも同じように大会中の記録を部内に残しているね。

氏家：地理的な経験差以外に何かありますか？

田添：これは特に同志社での課題だけど、自分たちの出場機を十分に乗りこなせていない。関東の選手は、出場機でかなりの回数、時間を飛んでいて、その機体でどこまでのことができるかを良く知っている。結果的に自信を持って前に進むことができるようだ。僕たちのように、4回生になって初めて大会出場機に乗るようではペースとして遅いし、大会までにその機体を熟知するだけの経験を積むことが難しくなる。なるべく早く単座機に移行し、単座機でのソアリング練習を十分に行える時間を作れるよう計画をたてて欲しいね。

松村：出場機を熟知することは必至。そのためにも、早くライセンスを取得してほしいな。そうすれば、普段の合宿中も、自分の判断で「今はいける!!」という時に、どんどん飛んで練習できるから。特にソアリング練習となるとライセンスの有無で練習量に大きな差がでてしまうのが現実。

田添：それに4年間という航空部生活を考えれば、より多くの時間をソロパイロットやライセンスサーとして過ごした方が絶対に楽しい。早めのライセンス、早めのソアリングを目指してほしい。

氏家：なるほど。計画的に飛ぶことが重要ですね。

松村：そう、しっかりとしたシラバスが大切。特に下級生はシラバスの重要性がわからないことがあるから、上級生が指導して、後輩の将来像をいっしょに考えてあげることも必要な。そうすることで同志社チーム全体の選手層が厚くなる。

田添：計画的に飛ぶということに関係するけど、地上での準備や観察も、実際に飛ぶのと同じくらい大切。これは急にはできないので、計画的かつ習慣的に行ってほしい。フライトの進度に応じた学科はもちろん、合宿中でも他人のフライトを観察する癖をつけよう。1日の総発数が50発だとして、自分が飛べるのはせいぜい2~3発。残りを無駄に見過ごしているとすれば、とてももったいない。他人のフライトを見ながら、自分が飛んでいる姿をイメージしよう。また、大会や条件の良い日には、上空の機体の高度やポジションを単に「点」としてとらえるのではなく、「線」としてとらえられるようにしたいね。どんなタイミングで前へ進み、どんなコースを飛んだ結果、現在の高度、ポジションにあるのかということを観察しておけば、自分が飛ぶ時の大きな助けとなるから。

松村：地上でできることで、是非試してほしいのがイメージフライト。これなら、いつでもどこでもできる上に、お金はかからない。どうしても僕たちは、合宿でまとめて飛ぶことになるし、雨で飛べない日もある。そういう時に何発か地上で飛んでほしい。現実には上手いパイロットは、実際のフライトの何倍もの発数をイメージの中で飛んでいる。それくらい頻ぱんにイメージフライトを実行している。

田添：いろいろな状況を仮想して、イメージフライトすることで、上空でも自然と体が反応すると

いうから試してみる価値は大きいね。そのほかに、空の雲を見ながら、プラスの強さを予想したり、飛ぶコースをイメージしたりすることも、いつでも簡単にできることだね。

氏家：普段からできることは、案外多いですね。ところで、今年は11年ぶりに同立戦優勝という快挙を成し遂げましたが、それについても何かコメントを。

松村：快挙!? (笑)。確かに結果だけ見れば、そう言えるかもしれないけど、内容はあまりにも盛り上がり欠けていた。同志社は、勝って当然の状況の中で勝っただけ。今回はもっとレベルの高い大会にしてほしいな。ライセンスの数では、立命館がまさることになるけど、今回の勝利をきっかけに今後、同志社の連勝が続くことを期待しているよ。

田添：大会数が少ない現状で、同立戦の存在は、僕たちにとって非常に貴重な。対抗戦を持たない大学よりも多くの大会経験を積むことができるのだから。競技会である以上、勝敗は意識してほしいな。ここ数年、特に同志社の方に勝負に対するこだわりがなかったように思う。戦略的に飛べるだけの経験と知識を養ってほしい。

松村：立命館とは良きライバル関係を続けてほしいね。両校共に、もうしばらく人数的にも厳しい活動状況が続くそうだし、お互いに学べるところは学び、刺激を与え合ってほしい。相手に弱味を見せることと、謙虚に相手の良いところを吸収することとは全く別の姿勢なんだから。そして、最近低迷している関西の私立大学をリードする存在として、同立そろって躍進するためのきっかけが同立戦であってほしいと思うね。

氏家：わかりました。次の同立戦も期待して下さい

い。では最後に、現役部員に一言お願いします。
松村：振り返ると4年間はあっという間だった。僕が入部した時は、先輩は全員で5名しかいなかった。おまけに次の年の入部者は、こんな氏家が1人だけ（笑）。いろいろと大変だった。それに、主将とウインチマンを兼ねていたから忙しかった。フライトの楽しさもわからず、ひたすらクラブ運営に追われた時期もあったけど、なんとか4年間続けることができた。そして、最後に全国大会でフライトという原点に帰ることができたことを本当に幸せに思う。これも先輩や同期、現役のみんなの協力があったから。どうもありがとう。現役部員にも、是非全国大会を目指してほしい。きっといい経験になるし、思い出にもなる。卒業後はみんなの成長を、身近に見ることができなくなって少し残念だけど、来年3月、妻沼に応援に行ったら、成長した同志社チームに会えると信じてます。

田添：4年間の航空部の活動で、本当にたくさん
のことを経験した。クラブ内での雑用処理件数ではナンバー1かな（笑）。現役のみんなにとって、クラブ運営はまだ厳しいのが現状だろうけど、そこで潰れないでほしい。初ソロ、ライセンス、大会と常に目標を持ってほしい。日々の雑用も全ては、フライトにつながっているからね。現役のみんなのがんばりに期待しています。それから全国大会を目指して下さい。大会が全てではないけど、やっぱり大会は学生時代だけのグライダーの楽しみ方だと思う。大会を目指す過程で距離飛行の知識を身に付け、本当の意味でグライダーで遊べるようになってほしい。僕は全国大会で初めて周回した時、すごく感動したし、初めてグライダーの世界の入口に立ったような気がした。最後に感動

的なフライトに出会えたことを幸せに思うと同時に、もっと早い段階でこの経験をしたかったという思いもある。現役のみんな、限られた時間の中で精いっぱい自分を速くへ飛ばして下さい。健闘を祈っています。



全国大会離陸前に作戦を練る
（左：松村謙太郎 右：田添順也）



支えてくれるクルーと一緒に

只今新人募集活動中

1年 横井斗南

只今新人募集活動中！新入生に配布するビラには、どのような事を書こうか？配布する枚数は？格納庫の場所が判り易いように地図も入れて。鳥人間（人力飛行機）とよく間違えられるからグライダーのイラストを一寸した説明も入れて。ポスターはシンプルに、遠目からも目立つようにして。出店に来てくれた人に航空部のどこをアピールしようか？グライダーの説明は、写真とかイラストを使った方が判り易いかな？……等々。より多くの新入生にグライダーのことを知ってもらい、興味を持った人には、更にその気持をふくらませて入部してくれるようにするために、全国大会の準備、イオラスⅡの耐検もある中、4月の新入獲得に向けてバタバタと慌ただしい日々が過ぎて行き、入学式まであと残りわずか。もう直ぐ新1回生が入ってきて、自分は2回生になるんだという実感が徐々にわいて来た。

去年の今頃、合格発表も終わって、下宿生活に必要な物を揃えながら、4月からの大学生活をあれこれ思い描いていたような気がする。

入学式当日、新しい生活への期待と一寸した不安を胸に大学の門をくぐった。門を入るとすぐに上回生と思われる人が近付いてきて、サッと紙切れを差し出してきたので、反射的にそれを受け取ると、次の瞬間、ドドッと津波のように同じような紙切れの束を持った人々が押し寄せて、次々にその紙切れを僕の手の上に重ねてきた。バサバサッと無造作に乗せてくるので、片手では持てなくなり両手で抱えるように持つと、ここぞとばかり、その上にサークルや部活のビラを重ねられた。アッと云う間の出来事で、かわすひまもなく、正門から50米ぐらいの間に数十枚のビラが手の上にあった。これが巷で云う大学の新人募集か、激し

いなと思った。駅前のティッシュ配り顔負けのすさまじさだった。

この時はまだ航空部の存在を知らなかったが、次の日、正門をくぐると目の前にプロペラの無いスリムな飛行機らしき物がドーンと置いてあった。「ん？何やるこれ」と思ったが、それ以上気に留めることなく素通りして、色んなサークルや部の出店をまわった。そして又次の日、同じ場所にデデーンと白い機体が目に入ってきた。「んー！これが飛ぶとしたら、どうやって飛ぶんだ？」と疑問に感じつつ横目で見ながらまた素通り。そして又々次の日、正門を通る度に白い機体が何度も目に入ってくるので、一寸話を聞いてみようかなと思ひ、「スミマセン！話を聞きたいんですけど」と出店を訪ねたのが、僕と航空部の始まりだった。

それから1年、色々なことがあった。6月の木曾川初合宿、天気は今一で、名古屋駅前のツインタワーは見えなかったが、高度400mの空中散歩、初めて見る眺めだった。2発目からは、自分で操縦だが、「え？え？」と感じて、手足のバランスで頭が一杯、眺めがどうのというレベルでは無かった。9月の福井では曳航されながら上昇すると目の前に海が!!「おおー」と思った。それからも、同立戦、合宿、全国大会と、本当にアッという間に1年が過ぎてしまった。しんどさ、つらさ、それを上まわる楽しさ。そんな経験が出来る航空部に新たな仲間が増えて欲しいと思うし、増やさなければと思う。それは我々部員の努力次第。